第３回高知県社会教育委員会（平成 24 年８月１日～平成 26 年７月 31 日任期）会議概要

平成 25 年６月 11 日（火）10:45～16:00

高知市立春野公民館芳原分館

１．現地視察（１０：４５～１２：００）

（１）芳原・歴史と子どもふれあいの杜

（２）春野（芳原）おもちゃ図書館

２．開会（１３：００～１３：０５）

（１）高知県社会教育委員会委員長挨拶

（２）高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶

３．議事（１３：０５～１６：００）

（１）公民館について

①高知市立春野公民館芳原分館の取組

【高橋委員より説明】

【質疑・協議】

（委員）

運営委員会と運営審議会とは違うのか。また、まちづくり協議会のメンバーとの重なりはどうなのか。

（委員）

芳原は、社会教育法で定められている運営審議会とは違うものである。運営審議会より実行委員会的要素が強い。審議もするが、それよりも企画・立案・運営という、行動化への取組が中心となっている。事業時は、自治会とまちづくり協議会からも協力を得るが、あくまでも公民館運営委員会が主体となって、企画・運営をしていく。

限られた地域なので、メンバーはどうしても重なってしまう。芳原地区には 12 の集落があり、それぞれの正副部落長が集まり、芳原自治会を構成している。そして、芳原自治会の中で互選されて、自治会の３役が決まる。自治会長が当て職として、まちづくり協議会に入る。まちづくり協議会のメンバーは、集落の互選で決まるので運営委員と重なることもある。

運営委員も、最初は各集落から１名の代表で構成されていた。ところが機械的に決めた委員では意識に温度差があり、改選を機会に委員を任意に依頼しようとなった。まず、現在の委員に残留の意向を聞き、メンバーの欠けたところは、多少集落は重なっても、やる気のあるメンバーをピックアップして頼むことにした。運営委員は、公民館の運営に理解と協力を惜しまないというメンバーで構成するかたちに変わってきた。

こうして、運営委員会の取組も充実してきたが、運営委員のいない集落もでてきた。取組の便りを全戸配布したり、まちづくりの広報紙で伝達しているが、やはり口コミが非常に大きな力を発揮する。集落で運営委員がいないことは大きな弱点だと感じている。全集落に運営委員がいる体制作りが課題である。

（委員）

運営委員はかなり替わるのか。

（委員）

現在は改選時に３分の２以上が残り、一番長い人は 10 年近くやっている。

（委員長）
資料１の最後に芳原の地区組織図があるが、芳原分館の運営委員会がいろいろな企画をしているという報告があったが、この責任者はどのように決まるのか聞かせてほしい。
（委員）
運営委員長は運営委員の互選である。
（委員長）
運営委員長が互選で選ばれて、その方が次の運営委員の方を探していくのか。
（委員）
欠員の補充は委員長１人だけに任せずに、運営委員会で候補者をあげて、長年運営委員をしている人が、一緒になって協力していく。
（委員長）
自治会との関係は分かったが、まちづくり協議会と運営委員会とはどういう関係なのか。
（委員）
まちづくり協議会は、合併のための準備組織として、行政からの要請で立ち上がった。どの市町村でも、合併賛成派と反対派が対立していた頃だったが、その対立を地域に持ち込まず、合併の有無は関係なしにまちづくりを真剣に続けていくならば、協議会を立ち上げようということになった。
当初は、各集落から互選された代表で構成していたが、公民館の活動が活発になると、協議会委員と当時の運営委員とが重なってきた。その時、分館長や運営委員長を当て職として協議会に入れた方がいいとの意見で、自治会長と分館長と運営委員長は、必ずまちづくり協議会に参加することに決まった。分館長は運営委員会の方にも出席している。公民館の事業を、まちづくり協議会も自治会も一緒になってやっていくということで、三位一体の取組が始まった。
（委員長）
まちづくり協議会と運営委員会は元々分かれていた。しかし、後から芳原分館長と運営委員会の委員長は、まちづくり協議会のメンバーにもなるというかたちに変わった。むしろ、そのことが芳原分館の活動自体を活発化するきっかけになった。
（委員）
企画・立案は公民館運営委員会だが、行事開催時に運営委員だけでは回らない時は、自治会やまちづくり協議会で役割分担をすることによって、地域全体の行事となっていくように心がけている。
（委員）
仕組みも含め、内容や組織に関していろいろ参考になった。芳原には 12 集落あるが、自治会長や副会長を決めていく時に、たくさんの世帯があっても同じ人で回ってしまうということはないか。
私の住んでいるところは、家はたくさんあるのだが、最終的には 10 家庭ぐらいで自治会長が回る。高齢者の人は、自治会長が回ってきても、できないと断るので、いくつかの家庭だけで回っていくようになる。その人たちが今度は、地区の公民館の代表にもなるようで、広がりの少ないことが活性化の進まない要因の一つと感じている。芳原地区はすごく活性化しているので、小さな集落の代表はどうなっているのか聞かせてほしい。
（委員）
芳原地区の12集落の最少集落は11戸、最大集落でも35、36戸である。その集落の中には親が住んでいて、子どもは別に家を建てて住んでいる。春野地区はほとんど市街化調整区域で、新しく家を建てることは非常に困難な所なので、子どもは分家をするなり、同じ敷地内に別棟として若い夫婦たちが住んでいる。そうなると世帯数は２つでも１軒の役割しかしない。親が元気なうちは、その住宅地を代表する人は１人しか出てこない。２人出てくるという家はほとんどない。
例えば、私の集落は 12 世帯があって、そのうち分家世帯が２世帯ある。１世帯はまだ若夫婦なので自治会に

も入っていない。もう１世帯は、本家も分家も両方が別々に自治会に入っている。集落で 80 歳以上の独居老人や老夫婦だけの世帯は、集落自治会に入ってもらっているが、行事への参加や役を強制することはせず、できることをやってくれればいいということにしている。部落長はもちろんのこと、まちづくり委員や自主防災委員など、本人がやりますと言った時だけやってもらって、それ以外の時は集落の清掃行事にしても、80 歳を１つのラインとして、一応やらなくてもいいことにしている。やれると思う時はやってくださいということである。

こうした状況では､正副部落長は 10 世帯ぐらいで回るようになるので、５年に１回のペースで必ずやらなければならない。これは芳原だけに限ったことではなく、中山間にいけば、ずっと同じ人がやらないと引き受け手がいないという集落もある。これが広がらない１つの要因であると同時に、そのような状況を前提として、何ができるのかということを考えなければならない時期にきている。

（委員）

私も同じように思っており、私の住んでいる地域は 53 世帯ほどあるが、結局、回るのが６、７軒ぐらいの家で、部落長もここで回るしかない。あとは高齢の方や独居の方、若い方でとてもそれどころではない。どこも同じ様な状態になってきた中で、芳原のように活性化するにはどうしたらよいか。

（委員）

集落で 30 代前半の若い世帯が、集落自治会に入ってくれた。ところが、地区のゴミ当番をやると、仕事の出勤に遅れてしまう。そういう時は、８時までのゴミ当番を７時半、もしくは７時 15 分までと、はっきり決める。そうすることで、安心して途中から抜けることができる。時間を決めることで、その時間までは本人も責任を持ってやるし、周りもその時間になったら、声掛けをする。また、その若い人が会計になったのを機会に、毎月集めていた自治会費を、１年に１回の集金に変え、若い人の負担を少なくした。このように自分たちの集落の現状に合うように柔軟に変化させてきた。

（委員長）

若い人がいない、なり手がいないという課題は、高知県の集落が持つ共通の課題である。集落の現状をしっかりと踏まえながら、きめ細かく決め事をすることにより、若い人が安心して仕事もでき、少しでも自分ができる時はやろうという意欲をつくり出している。そういう意味で芳原は本当に工夫ができている。

（委員）

私たちの集落では、強制的な取り組み方をしないように心がけている。例えば、掃除当番は夏場だと６時や７時に始めるが、若い人たちは遅刻することもある。そういう時でも非難しないようにしている。自分たちも若い時は眠かったから、早起きの年寄りがその代わりをすればよいという気持ちで、若い人を見守ったり、育んだりしていこうという気持ちを集落では持つようにしている。

（委員長）

芳原は、常にコミュニケーションをとったり、顔が見える関係づくりというものを心がけている。それが公民館活動にも生かされている。

（委員）

地域で顔が見えることは、家庭の実情も分かるから大事なことである。しかし、一方では、”今の若い人は”みたいなところがあるので、本当に過ごしやすく、関わりやすくするための決まり事も必要だと思う。

（委員長）

合併の時に賛成、反対という対決をできるだけしない。そこを協議会に持ち込まないという、この決断もその後のまちづくりに影響しているのではないか。

（委員）

集落で月番というのはあるのか。

（委員）

かつて集落では月番が非常に大きな役割を果たしていた。今は集落の自治会がきちんと運営できるようになり、

月番のする仕事がだんだん自治会へ移ってきた。現在は月番がすることはわずかになっている。ただ、月番制度そのものは残っている。

（委員）

冠婚葬祭などの集めものはどうか。

（委員）

それは集落の自治会で決める。冠婚葬祭、入院見舞いなどは、どれくらいでどんな形なら無理なくやっていけるかを話し合って決め事として文章化する。公民館活動への参加数で言えば、口コミと、集落のコミュニケーションや人間関係の密度の濃さというものが、行事の参加数と比例しているように思う。

（委員長）

公民館が元気になれば、集落も元気になる。集落が元気になることが公民館にとっても良いことである。

（委員）

公民館の果たす役割の中に、地域住民の支え合いづくりがある。それは公民館だけでなく、自治会やまちづくり協議会でも同じである。行政から人もお金も下りてこなくなった時代に、地域が元気に生きていくためには、地域の中でお互いが支え合っていくこと、それも、強制的ではなく、自然にできるような形を、どうやって仕掛けていくかが公民館の大きな役割だと思う。芳原分館の行事では、来館可能な地域住民のうち、実際の来館者は30％ぐらいである。その割合を増やしていくためにどうすればよいかということになってくる。やはり企画力。最終的には行きたくなるような企画を、どう打ち出していくのかということになる。それから宣伝・伝達。

（委員長）

最後の企画力について、これだけ多くの講座や教室を開催しているわけだが、集落にいる人たちがどんな思いで暮らしているのか、どんなものを教材、教室にしていったらいいかという企画の部分について教えてほしい。

（委員）

地区民の絆は、地域を知ることによって結ばれ、評価されていく。それが協働の源となる。趣味は心を開き、癒す媒体となって協働の輪を拡げる。全ては健康なくしては、何もできないということを留意点として講座の企画をしていく。最初は手探りだったが、現在は年に３、４回の講座が開かれる。１回は地域を知るということで歴史・文化に関する講座。健康講座は、地域の医療機関と連携しているので、このまま続けていく。それ以外に大人の塗り絵など趣味の講座から発展し、教室として定着した講座。そういう形で発展できるような講座を開いていくということが一番望ましい。周りの住民の意見を日常的に聞きながら、開催時期や対象を絞り、講座の内容を変えていく。４つほどの講座のうち、２つくらいは年々違う取組をしていくようにしている。

（委員長）

職員がいない状態で、５～６年間で 12 弾までふれあい行事を実施しているとはすごいの一言である。まさに住民の人たちがつくっている講座等には驚きである。

（委員）

午前中に地域を見せてもらい、今の話と重ねるとすごく納得する部分がある。春野町には、春野公民館があり、これだけ分館としてきちんと残ってきたところは県下でも非常に珍しい。いわゆるボトムアップの力があり、自分たちの理念を持ってやっているということがすごいと思う。

質問だが、旧高知市と旧春野町が合併して、プラス・マイナスがあるとしたら何か。そして、春野町は芳原以外でも、特色を持った取組をしているところもあると思う。分館と分館の間で交流があり、お互いヒントになっていることがあれば教えてもらいたい。

（委員）

春野町は昭和の合併以前には旧 10 カ村あり、それぞれに村役場があった。今､公民館の建っている場所は、芳原も含め、半分ぐらいは旧村の村役場の跡地にある。だから、合併前は地区ごとに張り合う気持ちがあり、自分たちのところは自分たちの手で、外に向かって誇れるものをつくっていきたいという気持ちがあった。

合併の前と後では、明暗がはっきりしている。高知市が５つしか分館を残さないという提案をしてきた。減らされることのないような公民館活動をしようというのが芳原分館の再生のスタートである。具体的には、県や四国や全国で事例発表ができるような公民館活動をつくり上げていこうと、必死で取り組んできた結果が今のような状況である。

それとは別に、地区の自治公民館というか、会議室のようなものでもいいではないかという考え方の地区もある。そういう所はサークル活動だけをやっている。春野町時代にも、住民の館に寄せる思いには温度差があったが、行政が支え合ってやっていこうという姿勢があった。高知市になった時には、自分たちの力で答えを出してくださいという状況になった。そういう面では合併の前と後では、分館の活動の格差が広がっている状況である。

芳原公民館と他の地区公民館との連携は、例えば、夏祭りに隣接地区に、子ども会同士が絵馬の貸し借りをする。行事の時、お互いポスター貼りを依頼し、参加を呼びかける。芳原公民館の活動というものが、春野町全体の分館長会にどう持ち込まれ、どのように全体に広がっていっているのか、あるいは広がりきれないのかはわからない。隣りの地区の館長が芳原に見学に来て、自分の地区の分館で取組を始めたイベントもある。

（委員長）

非常に元気なところはお互いに連絡を取り、子どもたちを交流させながらやっている。そういう地区と、ある種の諦めムードというか、部屋さえあればいいかぐらいの考えの地区とは、どんどん距離ができてしまう。県内の実態としてそういう格差が広がっているということであれば、そこに対する手立てや策を考えなくてはいけない。

一方、こういう芳原のような取組をどのように広げていくかというところである。春野中央公民館にどういっているのか、そのエリアでの広がりがどうなのかということを参考にしつつ、芳原の取組を県内にどう広げるか、新たな支援策として考える必要があると思う。

（委員）

「芳原・歴史と子どもふれあいの杜」は、県の施設を地元が有効に利用しているいい事例である。また、「おもちゃ図書館」では、支援の必要な子どもに対して、愛情からスタートしたいろいろな工夫がされおり、みんなに広めたいと思った。自分の学校でやっていた学校支援地域本部事業では、地域と学校をつなぐパイプ役のコーディネーターがいた。地域教育協議会という組織があり、その協議会の前に、企画会議が毎月あり、それを協議会にはかってもらい、学校支援ボランティアの協力の下に事業を展開していた。今日の場合だったら、毎月、運営会議をやっているが、これは、今まで自分がやってきた企画会議にあたるだろう。これを毎月やることがいかに大事であるか改めて分かった。自分の公民館活動では、そういった組織をきちんとつくってやるということが抜かっていたと思う。

土佐市の場合は、文化協会という大きな組織があり、ボランティアも150名ほどいて、運営審議会ではないが、地域教育協議会という社会教育委員との合同の会をしている。企画会が弱いところがあるので、今回学んだことを参考にしていきたい。

それと、前後するが、芳原分館のふれあい行事の工夫がすごい。春野高校生、高知大学生の若い力を活用したり、地元医療機関を巻き込んだ取組をしたり全国から新聞記事を集めたり、１つ１つの事業にアイデアがある。キラリと光るものがあると、事業も盛り上がるし、やる気を持つ人が確実に増えていく原動力になるということを改めて感じた。

（委員）

私の住んでいる地区も公民館活動は活発であり、公民館を支援する態勢もできている。毎月１回の清掃は、各部落ごとに順番でやっており、部落長が率先して運営をしている。また、公民館だよりが毎月発行されているので、公民館の事業や運営が住民にも伝わっている。

建物に関してだが、芳原分館は、１階に大きな部屋があるので使いやすい。私の住んでいるところは、何十年

も前に合併してから、各地区に公民館ができたので、大きい部屋はだいたい建物の２階にある。だから、敬老会の行事では、高齢者が階段を上らなくてはならないという理由から、参加しない人もいる。

（委員長）

第１弾から第10弾ぐらいまでは、みんな一生懸命やってきたが、少し疲れてきたため、11弾、12弾はちょっと工夫して実施するというかたちに変えてきたという話もあった。熱心な人がいる時はいいが、そこの辺りはどうか。

（委員）

メンバーの半数以上が運営委員を５、６年間は務めている。疲れてきた理由には、だんだん年を取ってきたことも、当然のことながら入っている。それで同じ行事を繰り返し行い、企画や準備の負担を減らしながら変化をつけ、マンネリ化をどう防ぐかということになる。手づくり作品展は、ふれあい行事で２回やっている。１回目は作品展の展示の中身をとにかく工夫し、２回目は来てくれた人が、館内に留まる時間を長くして、ふれあうことに重点を置くことにした。真ん中のスペースにお茶やお菓子や果物を置いて、座り込んで話をしながら、半分は展示を見て、半分はおしゃべりを楽しめるように変化をつけた。

企画はそれほど変わらなくても、準備する側の苦労は半減する。例えば１回やって、部分的に反省すべきところは別のアイデアに置き換えていくことによって、同じ作品展をやっても、同じ芋イモ祭りをやっても、去年と同じようにならない工夫をしていく。真夏の公民館行事、「芳原あしたの成人式」は、３部構成で、１部の式典とＪＡの女性部が中心になって料理を作ってくれる３部も変わらない。真ん中の第２部のところをどういうふうに変化させて、みんなが親しんで、参加して良かったと思える取組にするかということで、第２部の工夫を重点的に行いながら企画をしている。

同じ行事をするにしても、少しでも反省したことを手直し、新しいアイデアを取り入れ、マンネリ化しないような努力が大事である。

（委員）

公民館の最終目標は人づくりだと思っている。教育・学習を通じて、地域づくりに貢献するというのは、本当に素晴らしいことで、今はうまくいっていると思われる。今後を考えた時に、そういう人を循環してつくっていかなければいけないということになるが、そこをどうつくっていくかということが課題であり、しんどいところである。

（委員）

年齢の高い運営委員たちは、今年限りとか、逆に年齢はそれ程高くないが、親の介護に手がかかりだし、夜の会や行事に出られないなどの状況がある。では、それを補充していくのに、何か有効な手段があるのかというと、正直言って出たとこ勝負である。夏祭りの時に子どもの会の役員さんたちに20年後を託す会話をする。今日、明日の仕込みと10年、20年先の仕込みを同時にやっていかなければならないということである。来年の運営委員会、あるいは２年後、３年後を見越し、この人は定年になるからと期待しているところがある。しかし、定年後また働き出したり、今まで大変だったからせめて２、３年はゆっくり休ませてほしいとなる。「それでは、２、３年経ったらよろしくお願いします」というふうに声をかける。では、その２、３年の間はどう回していくのかということを考えなければならない。今、私たちが注目しているのは女性のパワーである。地域のことをよく知っていて、人間関係でもつながりを持っている。構成は男女半々くらいが一番理想的だろうと思う。

（委員）

見張りシステムになり過ぎると、システムの弊害も出てくるし、あまり個人に頼りすぎてもダメであり、そこが難しいところである。

まちづくり協議会は、公民館の利用者の中で自然に生まれてきたものだと思っていたが、実は官制のものだった。それが、今では公民館の中心になっていることが素晴らしい。今日、話を伺ったことは、全て公民館がやらなければいけないわけでもないので、役割分担みたいなところがあればいいと思う。

（委員）
公民館が、まちづくりや自治会と決定的に違うのは、公民館という建物を生かしてまちづくりの拠点とし、この場を生かせるような企画、運営の仕方をすることだ。公民館の運営委員がまちづくり協議会のメンバーにも入っているし、順番に自治会の部落長になることもある。その時に、自分たちの経験を自治会の活動に反映して、適切な役割分担をする努力をしている。自治会とまちづくりと公民館が三位一体でやることによって、１つの組織よりもたくさん人が集まる。少ない地域の人的資源の中で上手に分担しながら助け合い、それぞれの主催者を前面に出し、後ろの部隊がそれを支えて行事を行う。主催者側が一番力をそそがなければならないのは企画だと思う。これは、他の組織に変わってもらうことができない。それから、企画ができあがった時に、どこを自分たちが受け持ち、どこをまちづくり協議や自治会に依頼していくのかという役割分担をしっかりすること。役割を振った側に、それは公民館でやるべきことではないのかと言われないように、仕事を分担していくということも大事なことである。
（委員長）
本当に人づくりや組織化のイロハをたくさん聞くことができた。本当は社会教育主事や公民館職員は、そういう力量を持っているということである。
「仕掛け」と「人」という言葉が出てきたが、この２つを促すために、県としてどのような支援が、あるいは自治体がどういう関わりをもっていったらいいのかというのは、また後半で協議を進めていきたいと思う。

（休憩）
②高知県内の公民館の現状
【事務局より説明】

【質疑・協議】

（委員長）
この数値の基本は、文部科学省が３年ごとに実施している社会教育基本調査であり、高知版になっている文科省の統計も、このような取り方を基本的にはしている。数値の多い少ないというのが、市町村別に見られるところもあるが、これはそれぞれ市町村の工夫もあり、総じて言えば、現状維持が精一杯、あるいは少し下降しているということである。また、事業が急に減っていく理由も言ってもらったが、市町村に問い合わせて聞いてもらった限りでは、人が集まらないとか固定化している現状があるという話だった。
（委員）
１ページには、公民館の１館当たりの職員数が出ており、15 ページには１館当たりの利用者数が出ている。社会教育主事の議論の時も思ったが、人数がいれば活性化するのかというと、必ずしもそうではない。その人がどういうふうに考えて、どう動くかによって活性化は決まってくる。市町村別に検証していくと、職員は多いけど利用者が少ないというところがある。こうしたデータの背景になっている現状や原因が、どういうところから生まれているのかを見ていくと、かなり基本的なことが見えてくる。
２ページ目は、公民館運営審議会についてだが、例えば運営審議会は、設置していないけれど、利用者は多いというところがある。逆に設置は 100%だけども、利用実績の数値は、なかなか出ないというところもある。だから審議会があるから充実しているかというと、これは現場の状況を見ないとなかなか分からない。
３ページは理念である。理念を具体するのは実践なので、前半とリンクしている。
４ページと６ページの分析をどう活用するか。講座数を比較してみると、大幅に減少している。こういったこともなぜなのか、この統計をどういうふうに分析するかがすごく大事だなと思う。その視点も、県として全体を包括される時にはポイントになる。

５ページ入ると、ここも例えば１回しか実施していなくても「教養の講座を多く実施している市町村」に名前が出ている町がある。活性化しているということを、数値から見る時には、全体の活動数と項目別の構成比がどれくらいのものかを見ていくかがすごく大事なのではないか。それから、３年前と比べて公民館における学級・講座の開設が全てが減っている。例えば、公民館以外で民間が公民館を使わずに職場大学とかでいろいろなことをやっている。うちの館もいろいろなことに使っている。そういう部分との連動がどうなのか。これは指定統計の中には入れにくいかもしれないが、その視点も要るのではないか。

それから６ページでは、高知県は減り方（全国：△16.2%、高知県：△47.1%）がひどすぎではないか。その分析を見ていくと、８ページに成人一般対象が減って、女性と高齢者が微増しているということがあったが、ここでの課題は、成人一般対象が全国の落ち方よりもものすごく落ち込んでいるということだ。この原因が何で、どこまでカバーすることができるかが大事である。

あと、９ページでは、１講座当たりの受講者数ランキングで５回しかやらないところがトップと言われても、大きなものを５本やれば当たるのは当たり前で、これも母集団との関係がある。全般にグラフを見ての問題提起だが、そういったことを一応念頭に置きながら、ここの現状分析をしていくといいと思う。

（委員長）

この数値から、どういう点が高知県の弱点かを整理してもらった。

１ページ目では、自治体の職員として、専任で公民館にいるという人は、数えるほどしかいないという状況である。館長も兼任という場合には、教育委員会の課長を兼務していることが多い。専任はおそらく、中央公民館長で、公民館主事も数える程であり、高知県内の市町村立公民館の職員体制は、ほとんどが兼任、あるいは非常勤という状態である。

職員体制と利用者数から見れば、必ずしも、常勤ならいいのかということではないが、職員体制は、びっくりする。

学級数では、大事な指摘をしてもらった。成人対象の取組、事業、学級等が大きく減少していることを、どう考えるか。そこをてこ入れする、何か働きかけをする必要があるのではないか意見もあったかと思う。

（事務局）

高知県内で事業がかなり減少しているという状況なので、その原因を探らなければならない。全ての市町村には聞くことができていないが、いくつかピックアップして聞いてみると、行政の事業は減っているが、公民館事業は増えているという回答もあった。

行政で減っている原因としては、予算の問題や、参加者の固定化、減少、来て欲しい対象の方に来てもらえず、リピーターでほとんどもっているということだ。いろいろ市や町の広報紙でもＰＲはしているが、広報紙自体が読まれていない、皆の目に触れない。どのような事業をやっているのかが知られていない現状がある。

また､国の事業予算も少なくなり、平成 13 年度頃から激減してきている。新規事業を立ち上げる余力もなく、現状でやるのが精一杯という回答であった。

主な参加者である高齢者や子ども自体が地域で減ってきており、参加人数に影響している。参加者が減ると、開催数も減るという悪循環につながっている。

公民館の利用について、団体の使用料の減免や経費を見直し、小規模団体の利用や優先的に利用できることなどの改善点を言っていた。

（委員長）

芳原の取組では、まちづくり協議会や自治会を三位一体にしながら、元気がなかった公民館を再生してきている。データとしてはあがってきていないが、自治公民館も含めて、案外元気なところがあるのではないかと思う。もっと元気にするために、公立公民館の仕事の在り方そのものを見直してみたらどうか。講座を開いて人を集めること自体が既に限界がきていることも、この委員会の中で考えてもいいのではないか。

これは文部科学省の全国調査で、公民館は基本的に学級講座のイメージが強く、どうしてもそれを開いてどれ

ぐらいの人が集まったかという数値になりがちだが、高知の場合はもう少し違った物差しも出せるのではないか考えている。

（委員）

地区公民館（分館）と、平成の合併の終わった段階での市町村の公民館や中央公民館とは、抱えているエリアが全然違うので、公民館の在り方が違ってきて当然だと思う。地区公民館で人集めをするにはロコミが重要になってくる。しかし、各市町村の中央公民館は歩いて行ける距離ではないので、ロコミで何かを伝えるには広すぎる。そういう中で、公民館活動を底上げしていくには、一体何が必要なのか。審議会の役割は何か。そういうことを提言していかないと、生きた公民館活動はできていかないと思う。

市町村の中央公民館が十分なレベルで機能していないところ、公民館活動として活発にできていないことの方が、今の高知県の公民館活動の深刻な状況なのではないかと思う。どう改善していくのかということを、この社会教育委員会で答えを出さなければならない。

（事務局）

昨年、公民館の研究大会の中でグループ協議をしたが、中央公民館長と地区公民館長が集まって話しをしていてもよく分からない。結論が出ないというようなことがあった。

中央公民館の館長に「自分たちは何もやっていない」と言う人もいるが、市民講座やいろいろ生涯学習的なこともやっている。地区公民館とはやることが違うということで、中央公民館の役割と地区公民館の役割、それから分館というそれぞれの公民館の役割というものを一定示してもらい、地区公民館に対して中央公民館はどうしていくのかという提言をもらえると、県として、いろいろな公民館を抱えている市町村に話ができると思っている。

（委員）

参加者が固定化している。講座を開いても人が来ない。また、来て欲しい人には来てもらえない。私たちは一生懸命努力しているが駄目であると。その発想の中から、次へつながるかというと非常に疑問である。なぜ来てもらえないのか。時代は変化しているのに、去年と同じことだけをやっていいのか。恐らく公民館の在り方そのものも、かなり変わってきていると思う。中央公民館では、高齢化して職員の仕事が増えて、事業の時間が取れなくなったらどうやったら省力化できるかとか、いろいろ考えながら、変化をつけながらやっているという話があった。

僕らも同じようなことをやっていて、「こんなにいいことしているのに、なぜ来てくれないのか」と言っているうちは恐らく増えない。なぜ増えないのかのデータをきちんと取らなければいけない。この時にはどれぐらいの人がどのように来て、こういうテーマでやるとこの人たちが来るけど、特定の人は一切見向きもしてくれないとか、そういう試行錯誤があると、次にどういう手を打っていくかということにつながる。例えば、以前は夏季大学をやっていたら、必ず人が集まっていた。あれぐらいラインナップを揃えたら以前は来てた。みんな行っていたが、来る人の年代層を見ると、今はガラッと変わって若い人はあまり行かなくなった。いろいろ学ぶ場所や形態が変わってきたのではないかと思う。

だったら次に何をどういうふうにやるか。どの層が少ないか。うちの場合でいうと、高齢の方はかなり来てくれるが、若者、子どもが来ることは少ない。これは同じことをやっていると絶対厳しい。だから、思い切って、夏休みなどには企画内容を工夫すると人が増えて、今はそんな取組で回している。

例えば、今春「県庁おもてなし課」と「図書館戦争」の映画化と「空飛ぶ広報室」のＴＶドラマ化があったら、現役作家の展覧会は難しいけど、今までほとんど来なかった若いカップルなども来はじめた。これは、どういう人たちを呼びたいということと、呼びたい人にあったストライクゾーンを構えてやっているかということではないか。そこら辺をここ数年の公民館の活用状況、この３カ年の変化の中身をどう分析しているのかと。要は同じような事業内容を毎年やってないのか。成功してるところの事例はどこがどう違うのか。そう見ていくと、公民館の置かれている課題が、少し見えてくると思う。

（委員長）

大きくは２点、これから考えていくべき提案が出ていると思う。１点は機能や役割の整理について。もう少し、中央、地区、それから分館、さらに集落それぞれの機能は違うはずであり、役割もあるはず、そこが案外整理されていなくて、同じ様なことをやっていたりする。逆に言えばそれによって中央がどんどんどんどん先細りになっていくので、もう少し中央は中央なりの仕事の仕方があるはずだと。機能、役割の整理というのが１つあると思う。

もう一つは、企画や事業の取り組み方である。どういうふうに学級や講座を、開いていったらいいのかという提案だ。それに対して県として、どういう支援ができるのか。研修のあり方であったり、お金の工面は県の仕事なので、そこも含めて、企画や事業、教室、講座の展開の仕方といった提案が考えられるだろう。

（委員）

中央公民館の活動の大きな柱の１つとして、地区公民館のリーダー育成をしっかり打ち立てるべきだと思う。地区と中央が同じことをやっている時代ではないはずである。そして、地区公民館や地域公民館というのは人もお金もないし、企画もどうすればいいのか分からないとなると、それを助けるのが中央公民館の役割ではないかと思う。運営委員がやるのか、審議委員がやるのか職員がやるのかはこれから先の話になるが、まずは中央公民館が、自分たちの地域の公民館のリーダー育成は自分たちがやるんだという強い意志を持たなければいけないと思う。

そして、教育事務所の社会教育主事は、県と市町村を繋ぐ役割を持ってるはずである。

“市町村はこのようなことを望んでいるが、県はもう少しここのところを助けてほしい“とか、”県はこう考えているが、市町村はそれができるか“という、つながりをつけるのが教育事務所の役割だと思う。そういう意味で、教育事務所の役割は、平成の合併以降すごく大きくなっていると思う。西部、中部、東部というエリアの市町村の社会教育の底上げのためには、地元と県のパイプをどう作り上げていくのかに大きくかかってくる。お金がない、人がいないなら、ただで使える人はどこにいるのか。お金をかけずに何かする知恵は誰が持っているだとか。今ある中で、どう回していくのか、どう探し出していくのか。それができるように、市町村の中央公民館がしっかりとリーダー育成をしていかなければ、なかなか全部の問題を地区公民館で解決することはできないだろうと思う。県としてやってもらいたいことは、そういうことができるリーダー育成のための人的、財政的な面を確保して人材育成を前面に打ち出して欲しい。地域を支えていく人財を創っていくという視点で、お金も人も集中的につぎ込むくらいの気概で、公民館の活性化の施策というものを打ち出していって欲しい。

（委員長）

最終的にねらっているのは、地域の絆であり、地域が豊かになっていくことである。ずっと住み続けたいと思う人が増え、住み続けられる地域をどうつくっていくのかが狙いであり、それを学習とか文化とか、あるいはコミュニケーションとか、そういう視点から応援しようというわけである。リーダー養成に、シフトしてみたらどうかという提案である。

（委員）

他県では、市町村別のデータまで、なかなか出すことができないので、大変貴重な資料だと思う。そういう意味でこの表を見ていくと、平成 20 年に公民館の数もかなり減って、人も減ったにも関わらず事業がかなり増えていた。それはなぜかとマクロで見ると、お金も人も減っているが、お金がかからない事業を公民館が頑張ってやっていたのだろうと。そこに公民館主事や社会教育主事の役割があったと想像する。今回、そういう目でみれば、市町村別のデータでは、そういうことも言えなくもない。人がいるところは、利用者数が、受講者数が、違う。利用者には勝手に使っている人もいるので、その企画をした人がどう利用しているかを見た方がいいと思うが、講座の数も大事だと思う。企画力は大事なので、そういう見方をした方がいいのかなと見ていたが、人がいるところはやっぱりきちんと講座がやられていると見れなくもない。そういう意味で見ると、高知も頑張っている気がする。

それと、中央公民館と地区館の役割分担みたいなのは、何年も前から国も述べているので、そういう研修をもっと充実しなければいけない。県の職員の意識を高めていかないと、そういう指導もできていかないと思うし、こういう厳しい時代になってくると、県は公益的に何ができるかとなると、研修しかない。これだけ予算が厳しい状況になってくると、県の役割としては、人の資質向上をどう目指していくかということが非常に大事になってくると思う。

それから、中央公民館と地区館の役割が違うが、一番大事なのは、企画力である。利用者が何人いたではなく、どういう成果をその地域に上げてきているのかを言っていかなければいけない。公民館をつくると、これだけ地域がよくなりますと言っていかなければいけないので、そのためのデータをどう取るのか、評価をどうつけていくかということである。なかなか評価は難しいので社会教育関係者はやってこなかったが、まずは事業を企画するときに、目標を立て、目標に対してどこまでできたか評価していくべきだと思うので、そういう研修や手法の研究が、県の役割なのではないか。

活発に活動しているところは、目標をきちんと立て、評価もきちんとできている。それがないから、前年踏襲だったりする。今、この地域で何が必要なのかを把握することが大事である。

（委員）

中央公民館レベルでは、公民館の役割やそれに沿った企画を誰が、どのようにやっていくのかがすごく大事になってくる。審議会は審議会としてあっていいと思うが、もっと日常的に、常に公民館活動に寄り添って企画や運営をしていく中央公民館の人材がどこにいるのか。中央公民館の活性化を目指し、具体的な討論をして企画を考えていく運営委員会等が必要だと思う。中央公民館が変われば地区公民館も変わっていける可能性がある。

何かをしていこうと思ったら、人材が必要である。高知にはたくさんの人材がおり、活用したらその喜びが社会教育の明日を切り開いていくと思う。楽しい仕事をしないと、次へ続いていかないし、この仕事していて良かったという気持ちを、ぜひ市町村や県の主事の方に持って欲しい。それが、ある意味で社会教育の未来を切り開いていく大きな力になっていくと思う。

（委員長）

単に１人だけの能力や個人の努力に負うのではなく、大事なことは、持続的な仕組みを内側から考えて、つくり出していかなければいけないということ。ただ役割はこうですと言っても動かない。

（委員）

私の住んでいるところには文化推進協議会という組織があり、リーダー性を発揮している。趣味の講座の中になかったものを企画し、私たちが人を集めて活動をしている。講師は、学校を退職した校長先生などにお願いし、無料で開催してもらっている。公民館の何曜日の何時からということだけを確保すれば、みんなで楽しくやりましょうという雰囲気である。

ただ、建物が古くてとても使いづらい。そして、講座を開いても、公民館までの道は急な坂道なので、年輩の人は歩くのが大変である。車で行っても駐車場のスペースが少ないなど、施設の面で、行きづらいとなったら、人は寄って来ない。

健康福祉課が介護や健康の講座を開く場合は、１階がバリアフリーで入れる健康福祉センターで行う。公民館ではそういう健康の講座を開いても、ちょっと行きづらい。企画する時は、地域の人の意見も聞き、ニーズも取り入れながら、場所も使いやすい所でやろうとか、集落の公民館へ出て行って集めてみようとか、行政の課同士の情報交換が大事だと思う。地域の小集落では、案外人は集まるものである。

（委員長）

ハード面については、地域の状況や長寿県ということも忘れてはいけない。併せて、それぞれの部署の課題を学習するところはたくさんある。それを総合的にできるのが社会教育の価値だと思う。

本日は公民館が議題の中心であるが、次回は、学ぶ場や生涯学習という視点から、社会教育関係団体や高校などを議題にしていきたい。高知県の場合は、県立高校を地域の学びの場の拠点にしている。

（委員）

学校は教える側であり、生徒たちにはそれぞれの教育課程に沿って教えているわけだが、社会教育となれば、学ぶ側の立場になってくる。本校は前にも紹介したとおり、聴講制度をおいており、本年度は 37 名が聴講に来ている。その内容は、興味関心に従って、高等学校の授業に自ら参加するという形になっている。社会教育、公民館が行う講座にしても、学びたい講座というニーズがきちんと検証できているのかと感じている。

実は、数年前に自分の家のある地域の自治会長をやっていたが、年に１回の総会だけで全然活発ではなかった。しかし、東日本大震災があり、やはり”自分たちの地域の人たちの顔を知っておきたい”という気持ちが、自治会の中で生まれてきた。そして、十数年なくなっていた春のお花見をやろうという声もあり、来年の春は総会もやり、花見の会もやることになった。同じ場所で同じ様に学ぶことは、絆を深めていく１つの手段でもある。変化していく時代の中で、生活を送っていかなければならない時代なので、それぞれの世代に合った学びのニーズを、もう一度確認する作業も必要であると思う。

（委員長）

本当に学びたいとか、何かしたいと思ってる人は大勢いるはずだが、そういう機会が掘り起こされていないという現状がある。次回はその辺りに視点を置きながら、企画するということも含め、社会教育・生涯学習のあり方を検討していきたいと思う。

３．閉会

高知県教育委員会事務局生涯学習課課長挨拶